

意外に訳しにくかったのではないのでしょうか。古文は「何となく」ではなく、正確に訳せる力がないと得点には結びつきません。また、知識が定着していれば、「あまる」などは「暗記すべき単語ではない」↓「文脈や現代語から類推すべき」と判断ができます。知識は学習の第一歩に過ぎませんが、これからも知識の定着・運用を意識してください。

【解答・解説】

※文法は「――」、単語は「~~~~」、その他のポイントは「|||」で示してあります。

命令形

反語の係助詞

使役の助動詞

○嘆けとて 月やは物を 思はする

何かのせいにして

恨み嘆く顔つき

かこち顔なる わが涙かな

(訳) 「嘆け」といって月がもの思いをさせるのだろうか、いやそうではない。(それなのに)月のせいにして嘆く顔つきである私の涙だなあ。

【ポイント】

① 「とて」に注目して「嘆け」を命令形と理解する。引用の格助詞「と」やそれから派生した「とて」を見たらカギカッコをつける癖をつけよう。

② 反語の係助詞「やは(や+は)」や使役の助動詞「す」を正確に訳す。

③ 「かこち顔」はやや難しいが、単語として暗記していなかった場合でも、「託つ」という漢字や「かこつけ」という現代語が思い浮かべば意味が取れるはず。また、「かこつ」|| 「嘆く」という単純な暗記では「月のせいにして」という訳が書けないので、古文単語を覚える場合は、語源や漢字表記、現代語との関連などを総合的に理解しておくこと。

「しのぶ」を導く序詞
○浅茅生の 小野の篠原
しのぶれど
「小野」を導く枕詞
思いを隠す

思ひ余る・思ひが溢れる
あまりてなごか 人の恋しき

〔訳〕 浅茅が生える小野の篠原のように思いを隠して忍んでいるが、思ひが溢れてしまつて、どうしてあの人恋しいのだろうかと思われるよ。

〔ポイント〕

① 「しのはら」「しのぶ」という音に着目して「序詞」を見抜こう。序詞は「意味」「掛詞」「音調」などで見分けられる。なお、「浅茅生の」は枕詞であり訳さずとも良いが、ここでは不自然にならないように訳してある。

② 「しのぶ」は多義語であるが、後半の「恋」との関連から「恋心を隠す」意味と考える。和歌で「しのぶ」とあった場合、植物の「シノブ」との掛詞が思い浮かぶが、「シノブ」は軒下などに吊して観賞された植物であり、「小野の篠原」にそぐわないため、掛詞の可能性はない。

③ 「あまり」は訳しにくいのが、文脈を推測する時は「主語を考える」「近くの接続助詞に注目する」という鉄則を意識すれば、直前の接続助詞「と」に注目して「思いを隠すが、あまる」という関係から「思ひ余る・思ひが溢れる」と訳せるだろう。

④ 「人の恋しき」は「誰でも良いから」人が恋しい」と訳してはならない。「しのぶ」とあるので、「人」は「特定の相手(あの人)」と明確にすること。

⑤ 和歌の後半はそのまま訳すと「思ひが溢れて、どうしてあの人恋しいのか」のように不自然に文章になってしまう。右の訳のように「と思われる」などの言葉を加えるか、「溢れてしまった。どうして」のように二つの文に分けて訳そう。文法や単語だけを意識すると日本語として不自然な文になってしまいがちだが、訳文はあくまで日本語として無理のないものであるのが前提。